

鼎談「芥川賞・直木賞を語る」

10月12日午後、北九州芸術劇場・小劇場において、鼎談「芥川賞・直木賞を語る」をおこないました。いずれも文藝春秋OBの兩宮秀樹氏、岡崎正隆氏に、わたし（佐木）が問いかけながら進行役をつとめ、本音を語ってもらったのです。

早大露文出身の兩宮さんは、「文学界」の編集長をへて、財団法人「日本文学振興会」の事務局長になりました。この財団は、文藝春秋が基金を拠出しており、芥川賞・直木賞の勸進元ですから、もっとも精通した人です。

慶大仏文出身の岡崎さんは、本づくりの出版部に三十年間もいた人で、事業部長のころは芥川賞・直木賞の授賞式とパーティーの責任者でした。わたしは岡崎さ



んから、単行本と文庫本を五十冊ほど担当していただきました。

二百人が集まった会場には、「受賞者と作品一覽」が配布されており、皆さんはそれを見ながら、聞き入っています。

以下、文責は佐木で、発言の要旨をまとめました。

佐木 そもそも芥川賞と直木賞は、どこがどう違うのでしょうか。

兩宮 これは難問です。二つの賞は、文藝春秋社主の菊池寛が、友人だった芥川龍之介と直木三十五を偲んで、昭和十年に創設したものです。芥川賞は純文学、直木賞は大衆文学ということになっています。

岡崎 私は主に直木賞を担当していますが、芥川賞は雑誌に発表した作品、直木賞は単行本が多い。芥川賞は票が割れるけど、直木賞は満場一致という傾向はみられますね。

佐木 最終選考の候補作は、どうやって決めますか。

兩宮 同人誌にアンケートを取ったりして、文春の社内で三十人くらいが委員会をつくらせて下読みをします。局長クラスから入社五年の若手まで、見落としがあつてはいけないから一生懸命です。

岡崎 半年ごとの選考会ですから、私が三十年間に読んだ量は、どれくらいになるでしょうねえ。

兩宮 それに各社が、ギリギリになつて持ち込む。

岡崎 下期は十一月末で締め切り。佐木さんの「復讐するは我にあり」は、昭和五十年十一月三十日の奥付ですが、書店に並んだのは十二月初めで、滑り込みセーフでした（笑い）。

佐木 受賞作は、たいていベストセラーになります。各社は候補作にしてみよう、あれこれ売り込む、札束が入っていたようなことは？

兩宮 そんなことがあれば、私なんか家を四、五軒ほど建てていましてよ（笑い）。菊池寛が「審査は絶対公平」と書いているように、悲しいくらい公平ですね。

岡崎 そつでなければ、こんなに長く続いているんじゃないですか。私なんか自分が担当した作家が受賞できず、どれだけ口惜しい思いをしたかわかりません。

佐木 これまで選考委員会で難航したのは、どんな作品だったでしょうか。

兩宮 それはやはり第三十四回（昭和三十年下期）の石原慎太郎「太陽の季節」です。石川達三と船橋聖一が強く押しして、佐藤春夫が「美的節度がない」と反対し、「この場の議論には連体責任を負わない」と席を立っています。

岡崎 百三十五回の歴史のなかで、これほど騒がれたことはありませんね。

佐木 この作品が「文藝春秋」に載ったとき、私は十九歳で同人雑誌を始めたばかり。小説の場面に刺激されて、仲間と障子を突き刺して破ったことがあります。

兩宮 それは障子が濡れていたんでしょう（爆笑）。

佐木 受賞作でいちばん売れた作品はどれですか。

兩宮 それは第七十五回（昭和五十一年上期）の村上龍「限りなく透明に近いブルー」で、単行本が二百万部売れました。候補作は雑誌「群像」に掲載されたものです。が、すでに講談社は単行本化しており、売れるのを、われわれは指をくわえて眺めていました。

この日の会場には、第四百四回（平成二年下期）直木賞を「漂白者のアリア」で受賞した古川薫氏が、下関市から参加しておられた。岡崎正隆さんは、長年にわたって古川さんを担当しており、登壇していただいた。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

古川 私はずっと下関市を動かず、地方在住の作家だったのに、岡崎さんが面倒をみてくれ、ずいぶん単行本をつくってもらいました。岡崎さんからの手紙は、じつに二百通を超えています。

岡崎 地方暮らしのハンデがあるのに、よく諦めずに辛抱なさいました。

古川 いや、途中で何回か、「もう沢山だ、直木賞なんか要らない」と、放り出したくなったことがありますが。選考会の当日は、テレビ局が中継車を出したりして、今か今かと待ち構えている。それで「残念ながら今回も」と電話がきたとき、がつくりきますからね。

佐木 私も下関市のホテルで、一緒に待機したことがあります。それで電話が鳴ったとき、受話器を取ろうとして岡崎さんが足を滑らせたから、「あんたの責任だ」と、岡崎さんをいびつたものです（笑い）。

古川 そんなこともありましたが、しかし、ほんとうに岡崎さんには感謝しています。二人三脚でやってきて、ようやく受賞にこぎつけたんです。

佐木 やはり私たちは、編集者に助けられて、作家として生きていける。古川さんと共通の知人として、兩宮さん、岡崎さんに、心から感謝しています。